

HOMO SAPIENS (faber) からHOMO CURANSへ — 3.11で迫られる「人間観」の再考（「哲学」の転換）—

三浦秀春¹⁾

人間存在を表す学名は周知のようにHOMO SAPIENS（叡智人）です。

しかしながら、人間は「叡智人」（HOMO SAPIENS）などではなく、単なる「技術人」（HOMO FABER）にすぎない（『創造的進化』1907年）のであって、「人類は、自分の達成した進歩の重みに半ば押しつぶされて呻吟している。」（『道徳と宗教の二つの源泉』1932年）。こう述べたのは、ノーベル文学賞受賞者でもあるベルクソン（1859～1967）でした。

その警告から約40年後、アメリカの内科医ポッターは、現代科学技術の進展によって、自分自身の存在を自ら危険に晒している人類の「生き残りのための科学」（the science of survival）として「バイオエシックス」（bioethics）という学問の必要性を提唱（1971年）しています。

それから更に約40年、この「人類生存」のための包括的な学問の提唱にも関わらず、現代科学の知識・技術の発達とそれを補完すべき倫理・道徳の原理は未だ見出されていません。

それどころか、昨年（2011年）の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故とそれへの対応は、「西欧近代の知」の危うさを象徴するものであり、改めて全人類的な課題を突き付けています。

ここでは、HOMO SAPIENSという人間観の本質を再考することから、ハイデッガー（1889-1976）の「ケア」に依拠する存在としての人間のあり方を手掛かりにして、HOMO CURANSというあらたな人間観の展望を試みてみようと思います。

第一話：HOMO SAPIENSの本質 — リンネの命名における「人間の降格」

古代ギリシャにおいて既にアリストテレス（B.C.384-322）は人間における特徴として「知的欲求」と「善の希

求」を挙げています。（『形而上学』『ニコマコス倫理学』）

以来、人類は「知性」と「道徳性」を表裏一体のものとして尊び、とりわけその鎚となってきたものがキリスト教の思想であり、その条件の下で「西欧近代科学」が生み出され、発達してきたと言えます。

近代において、その担い手である「人間像」の明確な位置づけを行ったリンネ（1707-1778）の人間観にはそのことが如実に見て取れます。『自然の体系（第10版）』（1758）の「序文」にはこう述べられています。

「人間は、この世に出現して以来、自ずと、人間とは何者であり、何処からやって来て、何処へ行こうとしているのか、そして何のために人間は創造されたのかという問いに、そして更には、誰のお蔭で人間は保護されているのか、という問いにさし向けられて来ている。

他の全ての動物に勝って、人間はその本性において知的であり、ましてや、その精神の力によって、その感覚に訴えるものはどのようなものでも合理的に思考することができる。

そして、畏敬と驚嘆の念をもって、すべてのものを創造したそのお方の仕事を眺めることができるのである。」

「人間は、創造主の似姿として創られた、究極且つ最善の被造物である。」

ここには、「人間」を単なる「動物」の一種としながらも、ソクラテス以来の「自問自答する知性」において諸他の動物に勝る存在とし、更に一方では、「創世記」以来の伝統的な神学的人間観によって被造物の最高位に位置付けている。

つまりリンネにおいては、生物学的「自然存在」の体系に神学的位階である「ヒエラルヒー」が重ね合わされることによって人類の位置付けが行われていることが見て取れます。

1) 弘前医療福祉大学医療技術学科 教授

岡崎勝世氏は「リンネの人間論 ―ホモ・サピエンスと穴居人（ホモ・トログロデューテス）―」（埼玉大学紀要（教養学部）第41巻第2号 2005年）において次のように述べています。

「つまりリンネにあっては、人間を動物界の一員に位置付けることは、墮落した人間に対する、従来の位置づけからの『降格』として意識されていた」と同時に、他方「彼の発想は、ロック的あるいは啓蒙主義的というよりは、イギリスやフランスから見れば『時代錯誤』的でもある一つの特殊なキリスト教的精神から生まれ出たものであったと考えられる。」

HOMO SAPIENSとは、その成立において、西欧的―キリスト教的人間観の「完成」であると同時に、その「崩壊」の始まりを象徴しているものだと言えるでしょう。

換言すれば、デカルト（1596-1650）に始まり、ゲーテ（1749-1832）のファウストの苦悩を経て、バルクソン（1859-1941）の指摘に至るまで、「近代的人間観」とは、人間の「存在根拠」そしてその最高の特性である「知性」の「道徳的根拠」を喪失していく姿を表しており、その意味では、近代以降の人間は、自己存在の価値の「降格」を代償にして「進歩」していることとなります。

第二話：3/11で真に失われたもの ― マズローの「欲求説」と「マタイ伝」

平成23年3月11日以降、少なからぬ人々がマズロー（1908-1970）の「欲求説」を想起したことでしょう。周知の「欲求の階層図」は、被災した人々に「何が、」どのような「緊急度」や「重要度」で必要なかを解り易く理解させてくれますし、又、その「欲求説」は、看護の「ニード」論に生かされていることもよく知られていることだと思います。

なんといっても人間は、生理的な欲求を持たずには生き得ないのであるし、また、その最低限の「衣食住」等のケアがなければ到底生き得ないものでしょう。更には、生理的欲求も端に飢えや渇きを満たすだけでなく、安全で快適な「快眠・快食・快便」等が保障されなければなりません。しかも、人間はもとより共同存在ですから、自己を取り巻く生活環境や人間関係、社会的環境から歴史的環境等に至るまで、適切な欲求とそれに適切に対応するケアの在り方が大変大事になることはいまでもありません。

ところでそれでは、「欲求の階層図」で最上位に位置付けられている所謂「自己実現の欲求」とはどのようなことでしょうか。教科書的には、自分の人生を意義あら

しめるもの、生きる意味や目的といった風に理解されています。それはそれで間違いではないのですが、下位の欲求の絶対的必要性の理解からすると、その必要の切迫性に乏しく、特に日本人には、それ程必要性のあるものとは感じられていないのが実情ではないでしょうか。

欲求の「階層」構造の下位は「生存」の基礎であり不可欠であるが、そこから上の段階は出来れば満たされていた方がいいが、無くても「生存」には差支えがないと思われていないでしょうか。

しかし、マズローの本来の関心は「人間を人間たらしめている究極のものは何か」、つまり、人間性の根拠と条件を解明することにあります。そして、それこそが「自己実現の欲求」を持つことであり、その究極の自己実現をはたすためにはそれより下位の欲求が満たされていることが望ましいということなのです。

欲求の「階層」性は、譬えて言えば、下から順に土台が積み重なっていくのではなく、まったく逆に、自己実現という究極の必要性のために、そこから釣り下がるように諸他の欲求が掘げられているとでも表現したらよいでしょうか。

マズローは、何事につけ「我々はそれらを失ってから、その真の価値を知るのである。」（『人間性の心理学』（小口忠彦訳、昭和62、平成12、産能大学出版部、p.246、1954）と述べています。

一体何の真の価値を失ったのか？

「人はパンのみにていきるにあらず」（マタイ伝、第4章、4節）ということだと思います。

人間は、創造主によって与えられた「自己の使命（mission）」を自覚し、実現することが求められていて、それを手助けすることがまた人間の義務であり「神聖」な行為だということです。

ここには、たんなる「知恵」ではなく、欲求階層の「充足（care）」という観点から、人間存在の新たな位置づけを試み、伝統的・教会的位階（hierarchy）に対応させる意図が見て取れます。

マズローは、『人間性の心理学』の「序言」の最初と最後のところで次のように述べています。

「（著作の意図は）我々が考えている人間のパーソナリティーについての概念を、人間性の『さらに高い』レベルに到達させることにより、拡大させようとしたので」（x xi）あり、「既に、超人間、すなわち人類それ自体を超越する心理学と哲学について考え始めることが可能である」（x x x x vi）と。

第三話：HOMO CURANSとは？

－ハイデガーと「ケア」に依拠する人間

マズロウとは別に、人間の本質を「ケア」そのものに置いて「人間の尊厳」のありかを描いているのはM. メイヤロフ（1925-？）であり、その著「ケアの本質」の冒頭において次のように述べています。

「誰かある人（格）をケアするとは、言葉の最も深い意味で、その人が成長するのを手助けし、その人の自己実現を手助けするということです。」そして続けて「たとえば、自分の子供をケアしている父親を考えてみましょう」（M. Mayeroff, On Caring, Harper & Row, 1971, 1990, p.1）と言って、「ケア論」を展開していきます。

ここで注意を要するのは、子供のケアをするのが「母親」ではなく「父親」であることです。欧米では子供の教育の担い手は母親ではなく父親であり、その遠因はキリスト教の「父と子」に由来していて、所謂、「父権主義（paternalism）」を体現しています。

つまり、メイヤロフも「ケア」に人間の存在根拠を置くにあたっては、キリスト教の「威光」によった「神聖化」が行われていると言わなければなりません。

ところで、キリスト教の「威光」によって人間を特別視し、人間が生み出す知識・技術の発達を補完すべき倫理・道徳の役割をキリスト教思想に担わせることは、今後とも期待でき且つ有効なのでしょうか。

それは、HOMO SAPIENSという近代的人間観が今後とも「善人の道」であり得るかどうかという問いかけでもありますし、そこからキリスト教思想が衰退してしまえば、「降格」された人間の「墮落」が加速されるだけなのではないのかという危惧でもあります。

ニーチェ（1849-1900）の「超人」思想は、「近代的人間観」の一つの行きつく先を表明していますが、それは又、キリスト教徒にとっては震撼すべき憂慮の念を引き起こすものでした。つまり、「神なき時代の人間」は、神に代わる存在に、その知性と道徳性を兼ね備えた「人間性」を最高度に発達させた「超人」にならなければならないのですが、果たして人間はその責務に耐えられるのであろうか、それとも別の『存在根拠』を見出さな

ればならないのだろうかという問題です。

そうした問いかけに応じて、新たな、非キリスト教的な人間観を提示しようとしたのは、ハイデガー（1889-1976）でした。ハイデガーは、ゲーテ（1749-1832）の『ファウスト』に登場する「憂い」（Sorge）をヒントに、人間の存在根拠を「ケア」に置く、HOMO CURANS（ケアする者）とも命名すべき人間観を提示しています。

HOMO CURANSという命名そのものはM.シェーラー（1874-1928）によるものですが、ハイデガーがHOMO SAPIENSという近代的人間観に代わる人間像を描こうとしたことに疑いの余地はありません。

その際の「ケア」は、マズロウのいう「欲求のケア」でもなければ、メイヤロフの「聖なるケア」でもない、自己自身の「死」を憂慮し、そこから自己自身の「生」のありかたを模索することが求められていることを自覚する、ある意味では、極めてシンプルな原初的人間に立ち還ることの勧めでもあります。

フランクル（1905-1997）も、自らのアウシュヴィッツ強制収容所の体験からHOMO PATIENS（苦悩に依拠する人間）という、仏教的思想に近い人間観を提示して、「超越」から「実存」へと、人間の存在意味への問いの方向転換を求めています。

「臨死存在」である人間にとっては「死」こそが生の活路を見出す「師」に他なりません。

昨年（2011年）の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故とそれへの対応は、改めて、「苦悩」を糧とし、生理的欲求の充足が即「自己実現」となるような「ケア」に依拠して生きなければならない人間の在り方としてのHOMO CURANSという人間観を思い起こさせます。

その意味では今一度、近代知の出発点となったF.ベーコン（1561-1626）の言葉に立ち戻ってみる必要があるのかもしれない。

「人間は、自然を征服するためには、自然に服従しなければならないのである。」